御殿の屋の軒端に、雀の子うみたるを遙かに見て、餘り慾しさに、取りに參りて候と申、將軍家いや〳〵おのれが心にはあらじ、誰がをしへけるぞと、いろ〳〵に御推問あれども、幾度も初め申せしことばにかはらず、おのれ事の由有のまゝに申さず、爭ひぬるこそ、年比にも似ぬ、不敵なれと仰られて、大きなる袋の中におし入れて、口を御手づから封じ給ひ、柱にかけさせ給ひ、事の由ありのまゝに申さゞらん程は、いつまでも、かくて候へと仰けれども、猶爭そひ申す事初めの如く、夜既に明て、常の御座に出させ給ふ、御臺所は夙く心得させ給ひて、かれが幼なき心にて、身のかなしさをかへりみず、竹千代君の仰なりと申さゞる事を、深く感じたまひて、女房達に仰せて、朝がれい召して、是たうべよとて給りて、又御手づから、元の如くにぬはせ給て、置させ給ふ、晝の程、將軍家入らせ給ひ、又推問ありしかど、終にことばをかへず、御臺所御わびことありしかば、さらば向後の事を、慎むべきよし仰せて、御ゆるしあり、將軍家御臺所にむかはせ玉ひ、彼が今の心にて生立たらんには、竹千代の爲には、双なき忠臣にて侍らんものぞとて、殊の外悅ばせ給ひしとなり、

〔甲子夜話九〕又此侯（松平治政、號二一心齋一、）ノ事ヲ聞タルハ、在職中ノ事ナリ、中澤道二トテ、心學ノ一流ヲ唱ヘ、一時都下ニ鳴レリ、當時權門勢家モ多ク延致ス、又假字ノ著述多シ、曰フ、人ハトカク堪忍第一ナリ、堪忍ヲ旨トセザレバ事成ラズト書テ、道歌ヲ載ス、

堪忍ガナル堪忍ガ堪忍カナラヌ堪忍スルガ堪忍、世ヲ以テ賞傳シテ皆相誦ス、一心齋心ニ悅バズ、一日道二ヲ其邸ニ招ク、期スルニ巳牌ヲ以テス、道二至テ謁ヲ通ズ、謁者不出ヤヽアリテ出、道二來レルコトヲ告グ、謁者入テ又不出コト良久シ、日已ニ午ニ及ベドモ如初、道二ヤヽ空腹ニナリ、人ヲ呼ベドモ人無シ、トカクスル中ニ自鳴鐘ノ音聞エ申時ナリ、道二シキリニ人ヲ呼ブコ厲シ、而後用人除々トシテ出ヅ、道二乃應召シテ來レルコトヲ言フ、用人入テヤガテ奥ニ通ラル